

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟
会報 No.32

平成18年11月16日

横浜能楽堂の飛躍



会長 新堀 豊彦

豪華を極めた開館十周年記念公演は、佳境に入っています。横浜能楽堂の持っている秀れた企画力と各流宗家をはじめ、一流の職分先生方との緊密な連携は、一公演ごとにその内容の素晴らしさと魅力を発揮し、私たちは感動のしつ放しと言っている状況におかれています。

八月から「江戸大名と能狂言」というテーマで、その第一回が「江戸城の謡初」でした。

これはまさに徳川将軍家の正月恒例の儀式をそのまま再現したものであり、奏者番に、山崎有一郎館長がなり、観世宗家の「四海波」に始まり、居囃子三番「老松」「東北」「高砂」を観

財政難の中、益々能楽堂が頑張って頂くことを祈念するものです。

連盟報告

企画事業担当 鈴木 力雄

一、平成十八年度定期総会

総会は四月一日現在の会員数五四八名（前年比五名増）のうち三一九名（委任状によるものを含む）により四月二十四日午後二時から横浜能楽堂二階レストランで開催された。

新堀会長挨拶、来賓祝辞（横浜市市民活力推進局・藤林文夫文化振興部長）のあと、連盟規約に基づき会長が議長となって各議案が審議され、十七年度活動報告、決算報告、監査報告、十八年度活動計画（案）、予算（案）は何れも原案のとおり承認された。役員改選では、宝生流渡井蘭子氏、金春流水屋政雄氏が退任し、宝生流服部雅夫氏、金春流水野次郎氏が理事に就任した。

なお、活動計画では、横浜能楽堂との共催事業である「第五十四回横浜能」の演能流派などが総会の時は未定であったが、（観）梅若会により十一月二十三日（木・祝）に演じられることが決まった。

二、第二十二回横浜五流能楽大会
今年の五流能楽大会は横浜能楽堂で快晴の九月十六日土曜日に行われた。素謡十八番、独吟二番、連吟四番、仕舞十三番、一調一番と多彩な番組で全部で三十八番が演じられた。

仕舞では、昨年の「同一曲の五流謡い競べ」が好評であったので、「高砂キリ」の五流舞い競べを行い、昨年同様好評であった。

第二十二回

五流能楽大会を終えて

当番幹事 金剛流 倉藤 睦子

能楽堂創立十周年行事のからみもあり例年より少し早めの九月十六日（土）の開催となりました。

寒い日、雨の日が続いておりお天気が大変気になっておりましたが、当日は好天気に恵まれ幸いでした。

今回は「能」は出なかったものの流派を越えての「一調」が彩りを添えてくれました。又昨年の五流連吟の競演を做ったものとして、仕舞「高砂」の競演を行いました。能楽堂十周年を祝う意味もあつての選曲でしたが、謡以上に各流派の特徴が顕著に見られて面白いものになっ

たと嬉しく思っております。素謡、連吟、独吟、仕舞と皆様の御参加は延べ人数二六五名となり、終演の時間も遅れる事なく皆様の御協力に感謝しております。

会前夜、能楽堂から第二舞台が午前十一時までダブルブッキングになっていたという連絡が入り肝を冷やしました。当方のミスではないものの、会の運営に大変な支障が出る事は必至、流派の中で相談し、楽屋、控室の変更を複数流派の幹事様にお願ひ、了承いただくという事になりました。この事では快く事に当たっていただき、混乱もおこらずに乗り切れ本当にホッといたしました。控室を間違えないように掲示、案内には心を尽くしたつもりでおります。又、この事で楽屋で今までと違った交流の場が出来た、第二舞台は申し合わせだけの場として利用したことで担当者は連絡などが今までよりスムーズになった、などの副産物がうまれました。

楽屋、控室を流派毎でなく男女でまとめるというのもこれらの運営の仕方として考えても良いのではないかと思います。何かと不行き届きがありましたが無事、会を終える事が出来ました。皆様に感謝しております。ありがとうございます。

『江戸城の謡初』を鑑賞して

金春流 水野 次郎

横浜能楽堂開館十周年記念企画公演『江戸大名と能・狂言』その初回『江戸城の謡初』を先日鑑賞しました。

当日は番組の内容もさることながら、一度に観世・金春・金剛三流の宗家御三家に出会える機会、まさに「千載一遇」の好日でしたから感慨も一入でした。宗家御三家による『小謡・四海波』『居囃子・老松、東北、高砂』は、わたくし達がよく耳にする「：謡は間と気合い。」を地でゆくものと受けとめることができました。

やはり庄巻は『舞囃子・弓矢立合』でした。御三家が直面で、同時に舞うという趣向…。地謡もそれぞれの流儀から三人ずつでの連吟。

素人のわたくしでは考えも及ばぬこと、事前に師匠の守屋先生からお聞きはしていましたがどんなことになるのか、いざ本番…。やはり下衆の考えでした。

御三家の舞はそれぞれに舞いながらも、他の師と接すること無く大きな舞を披露されました。地謡もそれぞれの流儀の違いがあるにもかかわらず、一つの流れに聞こえた、まさに最高の謡い合いと、受けとめました。

能楽堂を後にして、隣接する公園のベンチに着いても、言い知れぬ余韻がからだにありまして。謡を志しているが何を以てよしとし、目指しているのか…。わたくしに問うているようだ。

かつて読んだ『謡の習い方』△星野鎮子著▽に「玄人と素人の差は修行の程度の差。芸に寄する心持ちに変わりはない…。」と。そして「：くり返し練習、芸としての価値にまで高めなければ意味がない…。」とも。「：芸は知恵、悟りから生まれる、謡は伝統芸、錬成的な意義あり…。能を味わふには黙って千番の能を見る…。」と書かれてあったことを思い家路につきました。

いま考える。おとなが謡を習う以上、それを芸としての価値あるまでにたかめなければ意味がないように思います。

世阿弥は「おのれが心をみがきて、其の品に應ずる妙をあらわす」…。

本当に伝統芸は奥深いもの。

二月の遠足

副会長 堀内万紗子

恒例の五流の「集い」と「大会」を今年度は、どのグループが参加して賑やかに、楽しく、番組を構成しましょうかと皆で相談する役員会を、本年は一泊

でどこかにと言う事になり、湯河原駅集合で始まりました。

先ず幕山公園の梅の香りをとめがけてバスに乗り込みました。残念ながら余りの厳しい寒さが続いた為に三分咲きで全山、梅一色になる想像の世界でした。

宿に着き、温泉に入り「弱法師」「東北」と二番、たて続けに謡い、温泉で全員喉の調子も良好に、思いきりの美声、高らかに謡いました。まだお酒も頂前というのに「弱法師」の父「通俊」の名が「俊通」に改名状態になったり、これも温泉でのリラククスしての所以と思われました。

翌朝、土肥次郎実平一族の菩提寺の城願寺に「七騎落」のストーリーを思いだしつつ、お詣りしました。樹令、八〇〇年の「びやくしん」の巨木には、心底驚かされました。今年も頑張りましょうの、有意義な遠足でした。

横浜金剛会の活動について

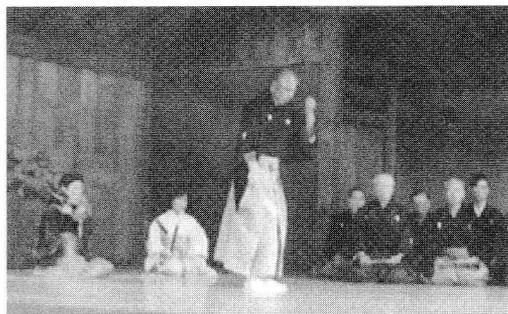
金剛流 条 亮一
豊増 清明

横浜金剛会が発足して十三年になります。

今年の会の大きな出来事は、発足以来初めて来られた望月悦夫会長（横浜能楽連盟元常務理

事）から豊増清明新会長へバトンタッチされたことです。

横浜金剛会は、昭和六十二年に横浜能楽連盟・新堀豊彦会長の加盟のお誘いを受けて、同年の「第二回各流合同謡曲大会」（舞台は久良岐能舞台）に初参加したのがきっかけとなりました。



平成18年の「謡曲と仕舞のつどい」から
『舞囃子 清経』

この大会に当流が出演した演題は素謡：泰山府君（二曲）、仕舞：加茂、鶴ノ段（二番）でした。

この会での会長挨拶で、新堀会長から「横浜能楽連盟に全流派（五流・一派）が一同に集まってこの様な大会が開催されたことは、非常に喜ばしいことである。全国を見渡しても全流派が集まって開催される会は何処にもないであろう」とお言葉をお承ったことは非常に印象深いものでした。

それまでは石川島播磨重工業の体育文化部・謡曲部が主体でした。

これを契機に、社内内の活動に留まらず、世の同好の士を集めて横浜での開かれた会とするため「横浜金剛会」と称えることとしました。そして横浜での金剛流の定着と発展に尽力された故田村信一郎師より、宗家の了承を得て、平成六年に正式に発足し、それから十三年経ちました。

前会長の望月氏は、横浜金剛会の立ち上げから現在の姿になるまで一貫して、会の繁栄に尽くされました。この間、この会として「横浜五流交流のつどい」、「横浜五流能楽大会」に参加してきました。

現在、本会に所属している団体・グループは十四グループ、会員数は一〇一名です。

日頃は、各団体・グループ毎にそれぞれの師範の元で活動を続けていますが、年に一度「横浜金剛会」のまとまりの中で「謡曲と仕舞のつどい」を開催し、それぞれ日頃の研鑽の成果を発表し合い、会員の相互の懇親を深めています。この「謡曲と仕舞のつどい」は平成十一年から毎年、開催してきました。

平成十五年は「謡曲と仕舞のつどい」が第五回目に当り、また横浜金剛会発足十周年記念として会を盛大に行い、舞囃子…

四番、連吟：九曲、独吟：五曲、仕舞：二十三番が競演されました。今年（平成十八年）は、第八回目となり、舞囃子：一番、素謡：一曲、連吟：七曲、独吟：三曲、仕舞：三十二番が競演されました。

二年後の平成二十年には、この会も十五周年を迎えますので、「謡曲と仕舞のつどい」を盛大に開催する予定で準備を進めています。

高齢化の悩み

喜多流 杉山 昭二

昭和四十年代の後半に会社で坂本寿大先輩を中心に謡曲を習おうという会が発足しました。

そこでお声を掛けて頂き参加することになったのが謡曲と関わったはじまりです。当時は喜多流の新進気鋭であった能楽士友枝昭世師が先生でわざわざ東京から横浜の磯子までお出で頂いたの稽古でした。その頃は能楽について何も分からなかったのですが先生の素晴らしい謡曲を伺って、これは是非やってみたいと思ったのが今日まで続いた所以です。

先生はお若く熱心にご指導頂き本当に感謝しております。でも会社の仕事との兼合いでお稽古に出られなかったことも多く

申訳なく思っております。そんなことで優秀な生徒ではありませんでしたが今日まで続けて来たことを本当によかったと思っています。

素晴らしい先生に巡り会え親しく指導頂けたことや謡曲を通じて沢山の方々とお知り合いになれたこと、素晴らしい能を鑑賞する機会に恵まれたことなどにより老後の趣味が増え生活の豊かさを得たことは感謝と共に恵まれたなと思っております。

折角ここまで続けてきた謡曲をこれからも続けて行きたいと思っておりますが、自分をはじめご一緒している方々の高齢化が気に掛かる問題です。これまでも仲間に加わって下さった方々の中でも転勤や仕事の都合で時間が取れないなど残念ながら去って行かれた方がおられます。色々新しい人を勧誘もしましたが中々若い方々は増えないのが現状です。このままでは先細りになることが心配ですがこれを打開する名案が浮かびません。最近では能楽堂、特に横浜能楽堂などは能楽の普及のための色々な活動を意欲的に行っておりおられる成果をあげておられます。その結果、能楽への関心が高まり能の催しへの参加は着実に増えたように思われます。しかしそれが謡曲をはじめようと

いうことには中々つながらないようです。

たまたまこの処、団塊の世代が定年を迎える時代となりました。その方々が今後どのような定年後を過ごすか、社会はこの変化にどう対応するかが問われています。色々難しい問題のあることは承知していますが、是非この方々の中から老後の趣味として謡曲を取上げてくれる人が多いことを期待しています。つまりそれは謡曲の良さを知ってもらうことが重要です。このために職分の先生を含めて謡曲の素晴らしさを味わってもらう機会をつくる必要があります。具体的にはまだまだ研究の必要があり是非実現できればと思っております。

関の戸ささで

宝生流 門脇 達祐

『老松』や『岩船』の次第に「関の戸ささで通はん」とありますが、これの典故は、西暦九十年頃漢時代の王充という思想家が著した論衡という書物です。

『市無二價（市場で掛け値がなく）、耕者讓畔（耕す者は畦道を譲り合い）、行者讓路（旅人は道路を譲り）、頌白不提挈（こま塩頭は物を下げたりせず）、

關梁不閉（関所や橋梁は閉鎖せ

ず）、道無捕掠（道中には物を掠めたり虜にする者がなく）、風不鳴條（風は枝に音を立てて吹かず）、雨不破塊（雨は土塊を砕かず）、五日一風（五日に一度風が吹き）、十日一雨（十日に一度雨が降る）』という天下太平のしるしを儒者が言っているのです。

王充はこれらの言葉を紀元前一世紀の史記や塩鉄論という書物、或いはもっと古い孟子や孔子などから引いて批評しているのですが、儒者が理想を述べるということの裏には、現実とは理想の状態だということがあるのでしょうか、中国は何千年もの昔から世の中が物騒だったのでしょうか。

外国のことは置きましょう。

わが国は、戦前戦中は官憲の高圧的な取り締まりや修身もあって、思想弾圧の暗い時代だったという点を除けば、治安に関しては今よりかなり良かったと思

います。戦後の自由な世になっても、高度成長期には、夜道も安全という時期があったのです。しかし今の世は、末世と言わずして何と言いましようか。抵抗しない小児を殺す。親子が殺し合いをする。浅ましき欲望に他を顧みない。外人による凶暴犯罪の多発。

『難波』にあるような、関の

戸ささで千里まで行ける世はいつ来るのでしょうか。俊徳丸は今も末世といいながら、見えぬ目で太陽を拝します。世の立ち直りを願って太陽でも拝したい気になります。

「関の戸ささで」の他にも、「枝をならさぬ御代なれや（高砂）」「雨土塊を動かせる（谷行）」「五日の風や十日の天が下（養老）」のように、前記の論衡の言葉を引いた曲は多く、宝生流では十四番に見られます。この中九番はめでたい初番目物です。

能作者の定型句でしょうが、それだけ、昔から平和を願う言葉として人々に好まれていたのでしょうか。同じ典故が十四番もこの曲に出てくるというのは、「一樹の宿、一河の流れ」が引かれて二十番に次いで多い数です。

能謡曲をやっている、狂女の悲しみを悲しみ、平家の公達や女人の哀れを偲び、或いは地獄の苦しみを察するもの結構ですが、現今では、関の戸ささで安心して往來できるよう、田村丸にならない、悪魔を鎮め都鄙安全を願って謡うことが、せめてものことだと思えます。

（漢文と通釈は「新釈漢文大系 69 論衡 是應第五十二 山田勝美著 明治書院」より引用しました）

能登紀行

副会長 高岡 幸彦

ここ二、三年前から老妻が金沢の兼六園をもう一度訪ねてみたいと言いだした。昔、女房を連れて金沢へ行った時は金沢から宇奈月へ行き立山を越えてきたので、今度は能登半島を巡って金沢へ行き兼六園を見る事とした。

ツーリストで調べてみると能登には二年程前から飛行場が出来て、朝、飛行機に乗ればその日のうちに奥能登を探訪出来る事が判った。

飛行機が能登空港に着くと観光バス「のと恋路号」が待っており、バスは先ず恋路海岸という所に行き助三郎、鍋乃という若者の悲恋物語を聞かせてくれた。「助三郎が恋仇に崖から海につき落され死んだのを鍋乃が悲しみの余り海に身を投げ後を追った」という物語。そこには二人の銅像が建てられていた。

それから珠洲ビーチという所に行った。とにかく能登には読みにくい地名が多い。これはアイヌ人がこの地に残っていた為との事で、地名では羽作、宇出津、九十九湾、男女滝等がある。次に訪れたのは上時国家という建物であった。ここでは思わざる史実を知った。平清盛の義

弟、時忠(清盛の妻時子の弟)が平家滅亡後も、神器の帰座の功により殺される事なくここに配流され、これはその時の配所であるとの事でさすが平家一門の配所なので「なげし」等に特に細かい彫りがあり、現在では国の重要文化財となっている。

次に驚いたのは、こんな寒い所に塩田があった。塩田は瀬戸内海のような気候温暖で雨の少ない所でこそ出来るものと思っていたが、こんな寒く雪深いところに塩田があり、しかも瀬戸内の塩田も今では昔語りになっている。この塩田は現在でも稼動している。この塩は上質塩として扱われ、販売されていた。

次に輪島のキリコ会館を見学したが、これは青森のネブタを彷彿させるものであり、高さでは秋田の竿灯を思わせる所があった。何か東北の祭に似ているのはアイヌの伝統で相通ずるものがあるのかと勝手な想像をした。

こうして一日目は終点の和倉温泉に到着。和倉では大変おぼえにくい「あえの風」という旅館であったが、行ってみたら大きな加賀屋の姉妹館で加賀屋へも出入り自由という事であった。

二日目、和倉を発ち輪島の朝市を見学した。老妻は子供達にやるんだと「わかめ」等わんざと抱えてきたが子供達が喜ぶか

大いに疑問に思った次第である。次に輪島塗器会館を見学した。輪島塗は私も百貨店勤務時代大変高価な物であるという印象を持っていたが、やはりそうそう買えるものではなく見て楽しむものだった。

次に「妙成寺」という日蓮宗のお寺を拝観したが、この寺は日蓮上人の弟子、日像上人の開山によるもので大変立派なお寺で本堂・五重塔は、加賀前田家の造営したもので国の指定重要文化財となっていた。

観光バスは「千里浜なぎさドライブウェイ」を一路金沢へ到着した。その日は宿で休み、翌日老妻の希望の兼六園をゆっくり見学。



金沢 兼六園

又、ガイドさんの説明では「義経の舟隠し」とか義経がしばらく逗留したと言われている所等、説明があったが義経一行

は謡では、二月十日に安宅を通り三月には福島県の岩代で「撰待」を受けていたのであまり長く逗留したとは考えられない。然し「安宅」にも「腹立ちや日高くは能登の国までさうずる」と思いつるに」とあるから能登へ行った事は間違いない。

安宅の難局をきり抜けた後なので数日の休養をとったか又は身の危険を感じ、しばらく様子をみた等のことは想像される。

能楽堂だより

十八年十一月以降の公演

横浜能楽堂では、開館十周年記念企画公演を開催中です。

江戸大名と能・狂言

第五回「徳川光圀と能」

十二月二日(土)午後二時開演

講演「藤井紋太夫の成敗 水戸黄門記」

能「鍾馗」(喜多流) 香川靖嗣

能「筑摩江」(喜多流) 出雲康雅

第六回「井伊直弼と能・狂言」

一月二十七日(土)午後二時開演

狂言「鬼ヶ宿」(大蔵流) 茂山千之丞

能「筑摩江」(喜多流) 出雲康雅

各回とも、S席六千円、A席五千円、B席四千円。

残席少なくなっておりますので、売切れの際はご容赦下さい。

お問い合わせ・お申し込みは、

〇四五(二六三)三〇五五まで。

「謡・仕舞」のお勧め

六百年以上の歴史と伝統のある能楽は、日本文化を代表する伝統芸能であるばかりでなく、ユネスコの世界無形文化遺産にも指定されています。

この伝統芸能の発展を願っている、横浜能楽連盟はこの十年来、能の鑑賞者はますます増えているが謡や仕舞を習おう、やってみようという方が増えないという難題を抱えています。

役員会では、これの解決策探しに苦心しています。

これの一つとして、会員諸兄の身近で能・謡曲の良さを知ってもらい、謡・仕舞を趣味にしたいという方々(老若男女)を一人でも多く増やしていきたい。各流の役員に連絡してください。

編集後記

▽喜多流・杉山昭二氏から「高齢化の悩み」の寄稿がありました。同じ悩みをもつ者として、謡を習おう・やろうという人のいない昨今の状況を改めて考えさせられました。みんなぞ知恵を出し合っていこうと思えます。

横浜能楽連盟 連絡先

◎文書郵送又はFAXの場合
〒233-0013 横浜市港南区丸山台丁目
二九一七 新堀方
FAX 〇四五-一八四四-二九〇三
◎電話の場合 横浜能楽堂
TEL 〇四五-二六三-三〇五五